

Title	印刷機と羽根ペンと：中世末期イングランドの印刷所をめぐる書物ネットワーク
Sub Title	Press and pen : networks of book makers and print culture in late medieval England
Author	徳永, 聡子(Tokunaga, Satoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2022
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.123, No.3 (2022. 12) ,p.5- 18
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松田隆美教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230003-0005">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230003-0005</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 印刷機と羽根ペンと

—— 中世末期イングランドの印刷所をめぐる書物ネットワーク ——<sup>1</sup>

徳永 聡子

「中世とは何か」という問いを考える時、中世は何をもって終焉したのかという逆説的な視点から考えることは可能であろうか。おそらくその一つの実験肢として、ルネサンスの三代発明に挙げられる活版印刷術の誕生を挙げる人もいるだろう。かつては中世／ルネサンスという二項対立的な時代区分と同じく、中世写本と印刷本もまた別なるメディア文化としてとらえられてきた。精巧な金属活字とプレス印刷機、印刷に耐えうるよう改良された良質のインクを用いた活版印刷術は複合的な技術であり、個別生産を前提とする手書き写本とは本質的に異なる。また大量生産を可能とする活版印刷術の誕生と伝播は、ヨーロッパ社会の変容をさまざまなレベルで促したことは言うまでもないが、その一方で、中世の手書き写本において培われた伝統が印刷黎明期の本（インキュナブラ）にも連続と受け継がれてきたことへの理解は、具体的な事例研究の蓄積とともに深まっている。例えば、書物の歴史において聖遺物的存在ともいえるゲーテンベルク聖書の第一葉に象徴的なように、初期の活字は写本の書体をもとにデザインされ、レイアウトにも写本との類似点や共通点が多い。黒インクで印刷された本文を手書きの欄外装飾が囲み、インキピットや章見出しもしばしば印刷後に赤インクで書き入れられた。書物やセクション区切り冒頭の大きなイニシャル（頭文字）は印刷の段階では空白のまま、後から予算や購入者の要望に応じて専門の彩色師（limner）や装飾画家（illuminator）の手により美しく描き入れられることもあった。

書物文化という側面から中世の終焉を観察した場合、次なる時代との接続点における状況がいかなるものであったのか——これが本稿の基底をなす問いであ

る。一般に、15世紀末は写本文化から印刷本文化への移行期と説明されるが、両文化の書物生産者たちは互いにどのように関わっていたのであろうか？ こうした問いへの検討は、とりわけ大陸のインキュナブラについては装飾画家や彩色師の研究を中心に進んでおり、装飾がなされた地域や工房の特定から、工房間あるいは職人同士の関係の理解も深まっている<sup>2</sup>。一方で海を隔てたイングランドの場合、総じて視覚的特徴や色彩を帯びた刊本の事例が少ないこともあり、多くは謎に包まれていた。しかし近年、イングランドに関しても、写本世界との接続について事例研究が少しずつ積み上がっている。特に欧米の図書館を中心に、大量の資料の来歴、製本、装飾などの書誌情報を収集して横断的に検討するデジタル環境が格段に整ってきたことも手伝い、個別本 (copy) レベルで copy-specific information や material evidence と称されるモノとしての本を特徴づける諸要素の比較研究が進んだことも背景にあるだろう<sup>3</sup>。個別には断片的だった情報を有機的に結びつけ<sup>4</sup>、本の生産者と受容者、印刷所と写本生産の現場の関係性などを立体的に描き出す試みである。本稿ではそうした事例として、ウィリアム・キャクストン (William Caxton) が立ち上げたイングランド初の印刷所を取り上げ、羽根ペンをういた専門家との関係という観点から最新の研究の整理と一考を試みたい。

イングランドの印刷黎明期はモノクロームの世界と称してもよいほど、金彩や彩色を施した初期刊本の例が少ない。かつて A. S. G. Edwards は「装飾されたキャクストン本」という画期的な論考において、キャクストンとイングランドの次世代の印刷業者の出版物で、刊行と同時期に彩色や装飾が施された例を分析した<sup>5</sup>。キャクストンの出版物では、装飾イニシャルが施された『イアソンの歴史』(オーストリア国立図書館所蔵) や、ボーダーやイニシャルに豪華装飾のある『カンタベリー物語』初版(オックスフォード大学マートンコレッジ所蔵)、オックスフォード大学セントジョンズコレッジの合冊本 (MS 266) に収められた三点などを挙げている<sup>6</sup>。しかし大陸に比するとイングランドでは装飾付きのインキュナブラは圧倒的に少なく、キャクストンの出版方針は書物の美的側面よりもコスト面を重視したと考えられてきた<sup>7</sup>。

だが近年、そうした理解とは少し異なる側面が浮かび上がっている。特に注目すべきは、写本生産との連続性の中でインキュナブラの装飾を捉える Holly

James-Maddocksの研究である。初期刊本に施された手書き装飾の新たな例を複数発掘し、中世末期イングランドにおける書物の文化的コンテクストの再構築を試みている。その研究の出発点には、James-Maddocks自身が行った中世後期に俗語で書かれた装飾写本の調査がある。1380年から1520年の間にイングランドに所在した約2,500点の写本の分析から、本文の書き手である写字生と装飾を手がけた装飾画家や彩色師が協働する様相を示してきた<sup>8</sup>。現在はその対象を、15世紀後半から16世紀にかけて出版された印刷本へと広げ、イングランドで印刷された本と大陸からの輸入本の中に、金箔や彩色を用いて装飾された38冊の印刷本を見出している<sup>9</sup>。加えてそれらの複数部に同一様式の装飾イニシャルと装飾ボーダーが共通することから、印刷所と連携して活動していた装飾画家・彩色師の存在を導き出した。その一つがキャクストンが出版した『黄金伝説』で<sup>10</sup>、こうした例はイングランドのインキュナブラのなかできわめて珍しい。

中世後期ヨーロッパ文学の金字塔の一つと目される『黄金伝説』(*Legenda aurea*)は、13世紀後半にドミニコ会士ヤコブス・デ・ウォラギネ(Jacobus de Voragine)によって編纂され、受容する地域や時代ごとに収録内容の変容を伴いながら、15世紀末までに原典のラテン語から各国語へと翻訳された。現在も約900点にも及ぶ写本と、15世紀に出版されたものだけでも150版以上の印刷本が現存する。イングランドでは少なくとも三種類の中英語訳が確認されており、その内の一つが、キャクストンが英訳、編集、出版のすべてを手がけた『黄金伝説』である。1483年11月から1484年3月の間に印刷され、「キリストの期節」「旧約聖書」「聖人伝」の三部から構成されている。キャクストンは翻訳の主要底本として1470年代にフランドル地方で刊行された仏訳版と同じ系統のテキストを用いたが、単にその仏訳版を英訳しただけではなかった。自分の版に含める聖人伝を取捨選択し、他方で底本にはない聖人伝を英訳版とラテン語版から補っている。加えて旧約聖書の一部も途中に挿入し、ヨーロッパに広く伝播した『黄金伝説』の系統の中でも異色ともいえる一書に仕立てている<sup>11</sup>。

全部で449葉にも及ぶ大著の『黄金伝説』は、大判のロイヤル判の紙が用いられた唯一のキャクストン版である<sup>12</sup>。また約70枚の木版挿絵が随所に入っている他、序文の冒頭には諸聖人の栄光を描いたほぼページ全面を占める大きさの挿絵が、また献辞には本書の刊行を後押ししたアランデル卿ウィリアム・フィツアラン(William Fitzalan)のモットーと紋章を描いた半ページの木版画が添えら

れている。献辞の挿絵など多くの木版画がこの書物のために特注制作された<sup>13</sup>。長大な本文の翻訳と編集の労力に加え、紙や挿絵の版木などの印刷資材にもコストがかかっていることは、キャクストンが膨大にかかる費用のリスクを覚悟し、それに見合うだけの売り上げに自信を持っていたことの表れかもしれない。

『黄金伝説』は手書き装飾の面でも他のキャクストン版とは一線を画す。この書物の構成は、序文、献辞、目次と続いた後に本文が「聖人の期節」の部から始まり、最初の章である「キリスト生誕」の冒頭 (a1<sup>r</sup>) ‘The tyme of thaduent’の大文字Tは手書きで挿入されるべく、ガイドレターの小文字tが小さく印刷され

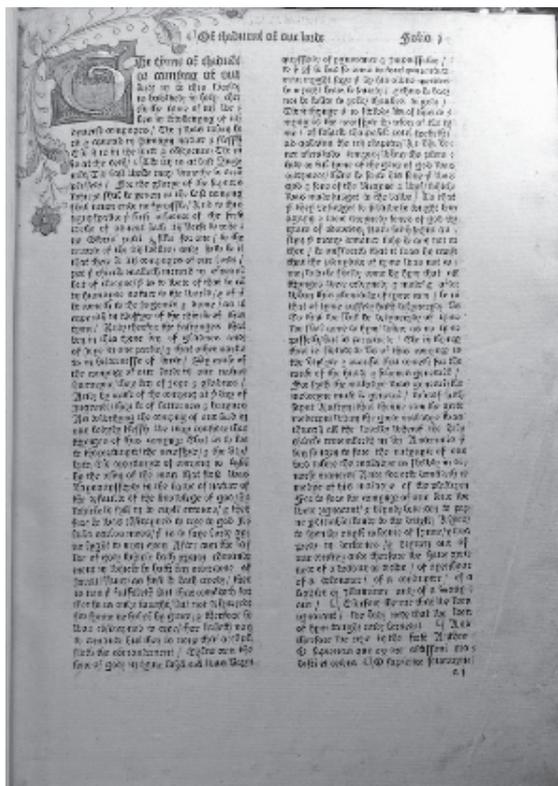


図1：キャクストン訳『黄金伝説』  
(ウェストミンスター、[1483-84年])  
Jacobus de Voragine, *The Golden Legend*, trans. by William Caxton (Westminster: William Caxton, [1483-84]), sig. a1<sup>r</sup>. By permission of the Library & Archives of the Condé Museum, Chantilly.

ている。現存する冊子体の大半はここに印刷後に赤インクでイニシャルが書き入れられているのだが、現存本33冊の内、ケンブリッジ大学図書館、シャンティイ城コンデ美術館、ヘリフォード大聖堂図書館、パリのマザラン図書館が所蔵する計四冊には、金箔を用いて同じデザインの大文字Tが入っている(図1参照)<sup>14</sup>。加えてこれらの四冊にはイニシャルの背景と欄外余白に同一デザインの装飾が施されている。イニシャルTの四つに分かれた背景は青色とピンク色で彩られ、白色とおそらく銀色を用いて線飾りや縁取りがなされている。またページののど側と天

の余白に蔦が一本ずつ伸び、それぞれの蔦に沿って大小の形状の葉が描き込まれている。これら四冊以外にも、米国議会図書館所蔵本にも色彩は施されず未完のままだが同様の装飾が描き入れられる予定であったことが下絵から推察できる<sup>15</sup>。議会図書館本も含めた五冊の葉の形状は、細かな点での相違は見られるものの様式や全体的なパターンは一様で、余白を適宜埋めるためのテクニックが用いられている。すなわち同じデザインの装飾を同一人物が印刷後に転写したものであり、James-Maddocksはこの職人を‘Incunables Limner’と名付けた<sup>16</sup>。また大英図書館本にも同じパターンだが技量の劣った装飾イニシャルが入っており、‘Incunables Limner’のデザインを模写して描き入れられたようである<sup>17</sup>。

金箔や色彩の装飾イニシャルが施されたキャクストン版は、先に挙げたように他にもあるが、『黄金伝説』のように同一パターンの装飾イニシャルが複数部に共通して見出される作品は他にはない。またキャクストン版『黄金伝説』の現存本は、初刷りだけで構成されるものと部分的に組版が組み直されたページを含むもの、あるいは再製本などの過程で二種類が混合したものの三種に大別できるのだが<sup>18</sup>、興味深いことに前述の五冊は全て初刷りの群に属する<sup>19</sup>。これらを考え合わせると『黄金伝説』がキャクストンにとって特別な本であり、最初の回の印刷が終わると直ちに金箔や装飾を施す手配をした可能性も考えられる<sup>20</sup>。

それではこうした手書き装飾は一体どこで施されたのであろうか。この点を考える上で、James-Maddocksが大陸からの輸入本に‘Incunables Limner’による装飾を見出し、同時代のコンテクストの中に位置付けた分析はきわめて有益である<sup>21</sup>。‘Incunables Limner’が装飾イニシャルを施したとされる大陸本は次の五冊である（刊行年順に列挙する）。

1. ケンブリッジ大学コーパスクリスティコレッジ所蔵、ヴァンサン・ド・ボーヴェ『道徳の鑑』（ストラスブル、1476年）、カンタベリー大司教マシュー・パーカー（Matthew Parker, 1504–75）旧蔵<sup>22</sup>
2. ブリストル中央図書館所蔵、プリニウス『博物誌』（パルマ、1481年）、ヘリフォード司教リチャード・メイユ（Richard Mayhew/Mayew, 1439/40–1516）旧蔵<sup>23</sup>
3. オックスフォード大学リンカンコレッジ所蔵、フラヴィオ・ピオンド『ローマ復興』（ヴェローナ、1481–82年）、ソールズベリー司教エドマ

ンド・オードリー (Edmund Audley, d. 1502) からリンカンコレッジに  
1513年 (?) に寄贈された18冊の内の一冊<sup>24</sup>

4. ケンブリッジ大学ペンブルックコレッジ所蔵、マンドのドゥランドゥス『聖務の理論』(ストラスプール、1483年以前)<sup>25</sup>、1480年代ロンドンで活動した製本師 'Indulgence binder' による製本、トマス・ライト (Thomas Wryght, Fellow of Pembroke Hall, fl. 1465–88) からペンブルックコレッジへ1485年に寄贈<sup>26</sup>
5. ウィンチェスター大聖堂図書室所蔵、ジョン・プロムヤード『説教大全』(バーゼル、1484年以前)<sup>27</sup>

ここで注目すべき点は上記書物の出版地と出版時期である。ストラスプール、パルマ、ヴェローナ、バーゼルで出版され、ヴァンサン・ド・ボーヴェ以外は1480年代の印刷である。直接的な証拠には欠けるものの、1483–84年に出版された『黄金伝説』と同じスタイルの装飾イニシャルと欄外装飾が入っていることから推察するに、上記の五点が大陸での印刷後ほどなくイングランドに渡り、『黄金伝説』とはほぼ同時期に装飾されたことは十分に考えられそうだが、James-Maddocksはこの推察を、書物の製本と来歴情報から説得力のあるものにしてしている。例えばリスト四点目のドゥランドゥス『聖務の理論』は、ストラスプールで印刷後ほどなくイングランドへ渡り、15世紀末にロンドンで製本されている<sup>28</sup>。また二点目のプリニウス『博物誌』に描き込まれた紋章(図2参照)はヘリフォード司教を務め、1480年から1507年にオックスフォードのモードリンコレッジの学長となったりチャード・メイユーの紋章であることを同定した。装飾の注文主がメイユーであることを示す直接的な証拠はないものの、彼が印刷本の収集に関心を持っていたことを示す遺書の記録やその他の所蔵本などを手掛かりに、紋章と装飾はメイユーが本の購入時に特注したとしている<sup>29</sup>。プリニウス以外の来歴も、カンタベリー大司教マシュー・パーカー(リストの一点目、ド・ボーヴェ『道徳の鑑』)、ソールズベリー司教等を歴任したエドマンド・オードリー(三点目、ピオンド『ローマ復興』)、ペンブルックホールのフェローであったトマス・ライト(四点目、ドゥランドゥス『聖務の理論』)と、いずれも同時期に活躍した人物たちである。なかでも1481–82年に刊行された『ローマ復興』は、1485年にライトからペンブルックコレッジに寄贈されていることから、

同書がその寄贈前に、すなわち『黄金伝説』の刊行とほぼ同時期に金彩が施された可能性は高いとしている。さらに『黄金伝説』五冊と大陸本五冊と同じパターンの装飾イニシャルがイングランドの中世写本には確認されず、その装飾のデザインがフランドルやネーデルラント地方に一般的であることから、'Incunables Limner'は大陸出身で、印刷本の装飾を専門にしたとJames-Maddocksは提唱している<sup>30</sup>。

キャクストンの『黄金伝説』五冊と大陸本五冊に施された装飾が導き出した'Incunables Limner'の存在が、キャクストンの印刷所と大陸の印刷を

結びつける点は重要である。こうした特徴は、同時代にロンドンやウェストミンスターで製本された大陸本との関連からも確認されてきた<sup>31</sup>。手引き印刷の時代、印刷後は基本シートの束で販売され、製本は個別注文であった。15世紀後半のイングランドで用いられた製本の空押し模様や補強材の印刷屑(waste)を手がかりに、キャクストンと彼の後継者ウインキン・ド・ウォード(Wynkyn de Worde)と協働した製本師たちの存在とその製本例が20世紀に次々と見つかり、製本研究の泰斗Howard Nixonがまとめた一覧がある<sup>32</sup>。その多くはウェストミンスターでキャクストン(あるいはド・ウォード)が出版した本だったため、

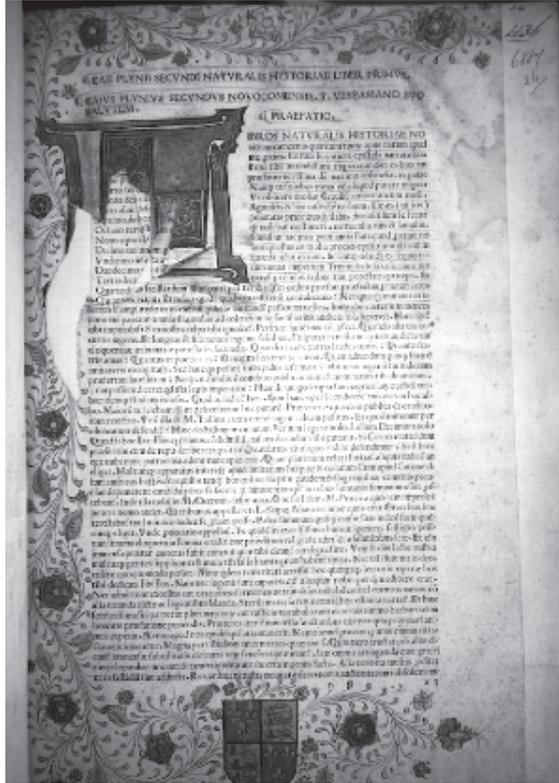


図2：プリニウス『博物誌』（パルマ、1481年）  
ブリistol中央図書館所蔵本  
Pliny the Elder, *Historia naturalis* (Parma: Andreas Portilia, 1481), sig. a2r. Bristol, Public Library, EPB 26/SR 134. © Bristol Reference Library.

製本師は‘Caxton binder’と称された。興味深いことに、キャクストンの印刷所以外にも、ウェストミンスター修道院に所属した写字生 William Ebersham 筆耕の写本や、オックスフォードで印刷されたインキュナブラ、さらにはリヨン、バーゼル、ストラスブル、パリといった大陸の書物都市で刊行された印刷本にも、‘Caxton binder’によって製本されたものがある。また空押し模様のパターンから、‘Caxton binder’たちはブルッヘやヘントなどのフランドル地方や、ニュルンベルクの出身であるとされている。立証する文書資料は現存しないものの、Nixon はこうした製本の事例から、キャクストン印刷所と大陸からの輸入本との関係や、キャクストン印刷所の軒下で製本が行われていた可能性を早くも前世紀に（断定は避けつつも）示唆していた<sup>33</sup>。

この‘Caxton binder’の製本リストに着目した James-Maddocks は、上述の ‘Incunables Limner’ が装飾イニシャルを手がけた『黄金伝説』と大陸本との比較から、キャクストンが従来考えられていたよりも初期の段階から書籍輸入業に関わっていたこと、そして ‘Incunables Limner’ がウェストミンスターの印刷所と接点を持っていた可能性を高めた<sup>34</sup>。これまでも中世末期のウェストミンスターやロンドン市内とその界隈を拠点とした写本制作者たちの存在は知られていた<sup>35</sup>。またも少数ながらも印刷所と写本生産の現場を結ぶ事例も報告されてきた<sup>36</sup>。だが、先行研究が可能性を示唆するにとどめていた印刷所と手書き職人の協働が、‘Incunables Limner’ の活動の分析を通してより具体的に描き出されたのである。

このような印刷所と写本関係者の接続を考える際のもう一つの手掛かりとして、セクション区切りのイニシャルやパラグラフマークなどを色インクで書き入れたルブリケーション (rubrication) がある<sup>37</sup>。パラフマークやイニシャルなどの要素は、活字導入前は印刷後に手書きで施されていた。『黄金伝説』は現存本 (冊子体) 33冊の内一冊以外の全てにルブリケーションが入っており、キャクストン本の中でもルブリケーションが施された割合が高い<sup>38</sup>。このことは、キャクストンが印刷所内でルブリケーションの体系化を試みたとする先行研究を補強する<sup>39</sup>。James-Maddocks もまたこうした先行研究を援用し、部分的ながら、‘Incunables Limner’ が装飾を手がけた前述の『ローマ復興』を起点に一考を試みている。この印刷本のリンカンコレッジ所蔵本には、赤色や青色のインクで書き入れられた大型イニシャルに、花や葉などのモチーフがペンワークで施されているのだが、そのスタイルはイングランドの写本に一般的なものではなく、同時

代のフランドル地方あるいはネーデルラント地方で制作された写本に見出されるものである。これと同じペンワークの装飾モチーフが、'Incunables Limner'が装飾を担当したブリストル中央図書館所蔵の『博物誌』（以下ブリストル本）の冒頭ページの欄外にも描かれていることから、'Incunables Limner'が『ローマ復興』のルブリケーションも担当したとする推論である。さらには装飾イニシャル入りの『黄金伝説』五冊のルブリケーションが一貫して同じドイツ系のスタイル（Rheinische-style）で、書き入れを行なったのは大陸出身者であり、ゆえにそのルブリケーションも 'Incunables Limner' が手がけた可能性が提唱されている<sup>40</sup>。

しかしながら、James-Maddocksが依拠したキャクストン版『黄金伝説』のルブリケーションの分類表に基づくならば<sup>41</sup>、装飾イニシャルを有する『黄金伝説』の本文中のイニシャルのスタイルは、'Incunables Limner'が書き入れた装飾イニシャル（図1参照）とは異なるスタイルに属する。金彩のイニシャルTは内側にとめのある筆致で書かれ、全体的に丸みを帯び、上記の大陸本のルブリケーションと同じスタイルであるとこれだけから判定することは難しい。またこの分類表では、装飾イニシャル入りの『黄金伝説』のルブリケーションは一種類のみとなっているが、原本五冊を仔細に検討していくと、分類表では異なるスタイルとされている形状のイニシャルも見出される<sup>42</sup>。ルブリケーションは個々の特徴が少なく、写字生の筆跡と同様、一つの形状が一つのグループを作るとは限らない点に留意が必要である。

同様のことはブリストル本『博物誌』にも認められる。ブリストル本には各巻（Liber）冒頭に数行にわたる大型イニシャルが、より小さな文章の切れ目には小型イニシャルが、共に朱色で入っている（図3）。大型イニシャルには文様的な飾りが付されることもあるが、そのスタイルは概して『黄金伝説』の装飾イニシャルと類似している。一方で小型イニシャルの方は異なる形状で、装飾入り『黄金伝説』五冊のルブリケーションにより近い。これら二種類のルブリケーションは異なる人物による書き入れなのか、あるいは同一人物による書き分けなのかは、現時点での判定は難しい。その一方で、ルブリケーションという観点からブリストル本『博物誌』をキャクストンの出版物と比較してみると、先に述べた二種類のイニシャルの内、小型イニシャルのスタイルは、ケンブリッジ大学ペンブルックコレッジ所蔵のキャクストン版『恋する者の告解』のルブリケーションと極めて近い<sup>43</sup>。このガワーの作品はキャクストンが1483年9月

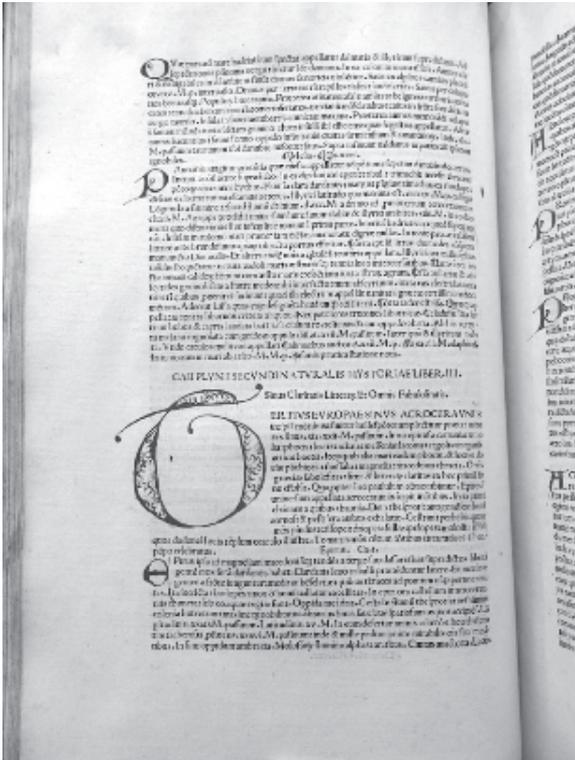


図3：プリニウス『博物誌』（パルマ、1481年）  
 ブリストル中央図書館所蔵本  
 Pliny the Elder, *Historia naturalis* (Parma: Andreas Portilia, 1481),  
 sig. e3v. Bristol, Public Library, EPB 26/SR 134. © Bristol Reference  
 Library.

中世後期イングランドの古文書や記録から、当時の書籍業関係者を丹念に調べたC. Paul Christiansonは、書籍業の登録者数が14世紀から15世紀後半のある時期までは増加の傾向にあったと指摘する<sup>44</sup>。14世紀半ば（1357年）には写生字と彩色師が所属するギルドがロンドンに存在し、15世紀初頭になると製本業者や書籍業者も加わったギルドが誕生した。Christiansonの統計によると、14世紀末の記録から特定できたギルドの登録者数は34名であるのに対し、1470年代には50名へと増加している。しかし続く1480年代を境に書籍業関係者のギルド登録数は減少傾向に転じている。この減少傾向が観察される1480年代は、キャクストンの出版物から手書きの要素が消失する時期と重なりが見られるのは示唆的である。

に、すなわち『黄金伝説』印刷の直前に出版した本であり、両作品がルブリケーションという点で共通項を持つことは時系列的にも十分に考えられる。ブリストル本『博物誌』が複数のキャクストン本と、装飾に加えてルブリケーションという点でも共通項を持つのであれば、キャクストンの印刷所あるいはその境界においてルブリケーションを含めた手書き要素が施されたことの傍証となり、彩色師と印刷所の連携のさらなる理解へとつながることが期待できる。

1484年3月の『イソップ寓話』の印刷時に木版イニシャルと活字のパラフマークを本格的に導入すると<sup>45</sup>、以後キャクストンの印刷物から手書きの要素は消失するからである。その一方で書物業に携わった者たち全員がこうしたギルドに所属した、あるいは所属が許可された訳ではない。例えば15世紀ロンドンでは筆耕者の約3分の1が「外国人」であったという概算も出されているが<sup>46</sup>、初期印刷文化をめぐる状況も同様で、15世紀末イングランドの書物文化はギルドに属さない外国人によっても支えられていた。キャクストンがウェストミンスターの一角に印刷所を設立した時、印刷物に手書き装飾を入れるための専門家を求めて、印刷所周辺の既存の書物ネットワークを活用したことは想像に難くない。そこにはイングランド人のみならず、大陸から海を渡ってきた職人もいた可能性は十分に考えられる。今後はルブリケーションを軸にインキュナブラと写本の横断的な分析を重ねることで、新旧メディアの接統点がいかなる状況であったのか、海峡横断的な視点も交えて印刷所と写本生産の現場の関係について引き続き検討していきたい。

## 註

- 1 本稿提出にあたり編集担当の原田範行先生より寛大なるご理解を賜った。この場をお借りして心から感謝申し上げたい。
- 2 Eberhard König、Lilian Armstrong、Mayumi Ikeda等の一連の研究が代表的である。比較的最近の論集として次の文献を挙げておく。*Early Printed Books as Material Objects: Proceedings of the Conference Organized by the IFLA Rare Books and Manuscripts Section, Munich, 19–21 August 2009*, ed. by Bettina Wagner and Marcia Reed, IFLA Publications 149 (Berlin/New York: De Gruyter Saur, 2010).
- 3 この動向については拙稿「インキュナブラ研究と copy-specific information」『人文情報学月報』63号【前編】(2016) <<https://www.dhii.jp/DHM/dhm63-1>>を参照されたい。最新の例として、2022 ILAB Breslauer Prize for Bibliographyを受賞したグラスゴー大学図書館のインキュナブラ目録、*A Catalogue of the Fifteenth-Century Printed Books in Glasgow Libraries and Museums*, ed. by Jack Baldwin, 2 vols (Woodbridge: Brewer, 2020) と、フィッツウィリアム美術館のインキュナブラ目録、*A Catalogue of Western Book Illumination in the Fitzwilliam Museum and the Cambridge Colleges, Part Five: Illuminated Incunabula*, ed. by A. E. Andriolo and S. Reynolds, 1:

- Books Printed in Italy before 1501* (Turnhout: Brepols, 2017) を挙げておく。
- 4 中心的な活動として‘Material Evidence in Incunabula’ <[https://data.cerl.org/mei/\\_search](https://data.cerl.org/mei/_search)> がある。
- 5 A. S. G. Edwards, ‘Decorated Caxtons’, in *Incunabula: Studies in Fifteenth-Century Printed Books Presented to Lotte Hellinga*, ed. by Martin Davies (London: British Library, 1999), pp. 493–506に詳しい。
- 6 *Le Recueil des histoires de Troie* (Ghent?, 1473–74), STC 15375, ISTC il00117000, London, British Library, IB.49410; *History of Jason* (Westminster, [1477]), STC 15383, ISTC il00112000, Vienna, Österreichische Nationalbibliothek, Inc.2.D.30; *The Canterbury Tales* (Westminster, [1483]), STC 5083, ISTC ic00432000, Oxford, Merton College, Sacr. P.2.1.
- 7 N. F. Blake, *Caxton: England’s First Publisher* (London: Osprey, 1976), p. 19; Edwards, ‘Decorated Caxtons’, p. 496.
- 8 Holly James-Maddocks, ‘The Illuminators of the Hooked-g Scribe(s) and Production of Middle English Literature, c.1460-c. 1490’, in *Chaucer Review*, 51 (2016), 151–86.
- 9 Holly James-Maddocks, ‘Illuminators of English and Continental Incunabula in England, c. 1455-1500’, in *Production and Provenance: Copy-Specific Features of Incunabula*, Library of the Written Word (Leiden: Brill, forthcoming); Holly James-Maddocks, ‘Illuminated Caxtons and the Trade in Printed Books’, *The Library*, 22 (2021), 291–315.
- 10 *The Golden Legend* (Westminster, 1483–84), STC 24873–74; ‘Introduction’, in *Caxton’s Golden Legend: Vol. I: Temporale*, ed. by Mayumi Taguchi, John Scahill, and Satoko Tokunaga, Early English Text Society, OS 355 (Oxford: Oxford University Press, 2020), xlix.
- 11 ‘Introduction’, in *Caxton’s Golden Legend: Vol. I: Temporale*, xvii–xxxiii; John Scahill, ‘The Wycliffite Bible as a Source for Caxton’s Legend of Judith’, *English Studies*, 99 (2018), 848–53などを参照されたい。
- 12 本書の書誌的情報は次に詳しい。Lotte Hellinga, ed., *Catalogue of Books Printed in the XVth Century now in the British Library, Part XI: England*, with contributions by Margaret Nickson, John Goldfinch and Paul Needham (t Goy-Houten, 2007), pp. 144–49.
- 13 Edward Hodnett, *English Woodcuts 1480–1535* (Oxford, 1935; rev. 1973), nos 237–305.
- 14 Cambridge, Cambridge University Library, Inc.2.J.1.1[3511]; Chantilly, Bibliothèque du Musée Condé, XXI-(1)-C-006; Hereford, Hereford Cathedral Library, K.5.6; Paris, Bibliothèque Mazarine, Inc 350.
- 15 Washington, DC, Library of Congress, Rosenwald 566 <<https://www.loc.gov/resource/rbc0001.2019rosen0566/?sp=18>>.
- 16 印刷本における徹底した装飾デザインの転写例については次の論考に詳しい。池田真弓「初期印刷本の装飾方法 —— 四五九年マインツ出版『聖務の理論』を例に」

『移ろう形象と越境する芸術——小林頼子先生退職記念論文集』小林頼子先生退職  
記念論文集刊行会編（東京：八坂書房、2019）、pp. 337–39 (pp. 54–56).

- 17 James-Maddocks, 'Illuminated Caxtons', pp. 292–93.
- 18 キャクストン版『黄金伝説』の印刷の実際は書誌学的にまだ解明していないところ  
が多く残る。問題の概要は脚注11・12の文献に詳しい。
- 19 各現存本の書誌記述は脚注10の 'Introduction', li–lxx にある。
- 20 'Introduction', in *Caxton's Golden Legend: Vol. I: Temporale*, xlix.
- 21 James-Maddocks, 'Illuminators', Appendix; James-Maddocks, 'Illuminated Caxtons'.
- 22 Vincentius Bellocensis, *Speculum morale* (Strassburg: Johann Mentelin, 9 Nov. 1476),  
ISTC iv00288000; Cambridge, Corpus Christi College, EP.B.1; James-Maddocks,  
'Illuminators', Appendix, no. 2; James-Maddocks, 'Illuminated Caxtons', p. 292, n. 4, p.  
297, Fig. 4, p. 301.
- 23 Pliny, the Elder, *Historia naturalis* (Parma: Andreas Portilia, 8 July 1481), ISTC  
ip00793000; Bristol, Central Library, EPB 26/ SR134; James-Maddocks, 'Illuminators',  
Appendix, no. 1; James-Maddocks, 'Illuminated Caxtons', p. 292, n. 4, p. 299, Fig. 9–10.
- 24 Flavius Blondus, *Roma instaurata* (Verona: Boninus de Boninis, de Ragusia, 1481–82),  
ISTC ib00702000; Oxford, Lincoln College, K. 8. 10 SR C. 1; James-Maddocks,  
'Illuminated Caxtons', p. 292, n. 4, p. 300, Fig. 11–12, pp. 301, 306.
- 25 Guillelmus Duranti, *Rationale divinatorum officiorum* ([Strassburg: Printer of the 1483  
Jordanus de Quedlinburg (Georg Husner), not after 1483]), ISTC id00427000; Cambridge,  
Pembroke College, C.4; James-Maddocks, 'Illuminators', Appendix, no. 5; James-Mad-  
docks, 'Illuminated Caxtons', p. 292, n. 4, p. 297, Fig. 5, pp. 301, 303–4.
- 26 James-Maddocks, 'Illuminated Caxtons', p. 303; see G. D. Hobson, *English Binding before  
1500*, Sandars Lectures 1927 (Cambridge: Cambridge University Press, 1929), pp. 20–21,  
pl. 45.
- 27 Johannes de Bromyard, *Summa praedicatorum* ([Basel: Johann Amerbach, not after 1484]),  
ISTC ij00260000; Winchester Cathedral Library, Inc. B. 1.
- 28 James-Maddocks, 'Illuminated Caxtons', p. 304.
- 29 James-Maddocks, 'Illuminated Caxtons', p. 305.
- 30 James-Maddocks, 'Illuminated Caxtons', pp. 303, 307.
- 31 Cf. James-Maddocks, 'Illuminated Caxtons', pp. 294–95, 304 など。
- 32 Howard M. Nixon, 'William Caxton and Bookbinding', *Journal of the Printing Historical  
Society*, 11 (1976–77), 92–113.
- 33 Nixon, 'William Caxton and Bookbinding', pp. 94–96, 105.
- 34 James-Maddocks, 'Illuminated Caxtons', p. 308–9.
- 35 Linne R. Mooney, 'Locating Scribal Activity in Late-Medieval London', in *Design and  
Distribution of Late Medieval Manuscripts in England*, ed. by Margaret Connolly and

- Linne R. Mooney (York: York Medieval Press, 2008), pp. 183–204.
- 36 例えは次の論考を参照されたい。Linne R. Mooney, 'Scribes and Booklets of Trinity College, Cambridge, Manuscripts R.3.19 and R.3.21', in *Middle English Poetry: Texts and Traditions: Essays in Honour of Derek Pearsall*, ed. by A. J. Minnis (Woodbridge: York Medieval Press, 2001), pp. 241–66.
- 37 ラテン語で「朱書き」を意味する *rubrico* から由来するが、朱色以外のインクも用いられた。インキュナブラのルブリケーションに関しては Margaret Smith の研究が先駆的である。Margaret Smith, 'Patters of Incomplete Rubrication in Incunables and What they Suggest about Working Methods', in *Medieval Book Production: Assessing the Evidence*, ed. by L. L. Brownrigg (Los Altos Hills: Anderson-Lovelace, 1900), pp. 133–46.
- 38 Takako Kato, 'Perfecting and Completing Caxton's *Golden Legend*: The Stratigraphy of Non-Homogeneous Copies', in *Production and Provenance: Copy-Specific Features of Incunabula*, Library of the Written Word (Leiden: Brill, forthcoming).
- 39 Kato, 'Perfecting and Completing Caxton's *Golden Legend*': 先行研究として、Satoko Tokunaga, 'Rubrication in Caxton's Early English Books, c. 1476–1478', *Incunabula on the Move: The Production, Circulation and Collection of Early Printed Books*, ed. by Ed Potten & Satoko Tokunaga, *Transactions of the Cambridge Bibliographical Society*, 15/1 (2012), 59–78 などがある。
- 40 James-Maddocks, 'Illuminated Caxtons', p. 306–8.
- 41 Kato, 'Perfecting and Completing Caxton's *Golden Legend*', Appendix 2.
- 42 Kato, 'Perfecting and Completing Caxton's *Golden Legend*', Appendix 2 によると装飾イニシャル入り『黄金伝説』のルブリケーションは Thin\_04 のスタイルと分類されているが、装飾イニシャル T の形状は Appendix の Round\_02 のスタイルである。また装飾イニシャル入りの五冊には Appendix の Round\_02 のルブリケーションも見られる。すなわちこの分類表に基づく少なくとも二つのスタイルのルブリケーションが確認される。
- 43 John Gower, *Confessio Amantis* (Westminster, 1483), STC 12142, ISTC ig00329000.
- 44 C. Paul Christianson, *A Directory of London Stationers and Book Artisans 1300–1500* (New York: Bibliographical Society of America, 1990), p. 39.
- 45 *Historyes and Fables of Esope* (Westminster, 1484), STC 175, ISTC ia00117500.
- 46 Mooney, 'Locating Scribal Activity in Late-Medieval London', p. 185.